

『太平記』の漢楚合戦譚

——虞美人の自殺場面の受容について——

山口 翔 大

●序章

本稿では、『太平記』巻九「主上・々皇御沈落事」、巻二十八「慧源禪菴南方合體事付漢楚合戦事」を中心に、その部分に描かれている漢楚説話における虞美人の自殺場面について考えていく。

軍記物語である『太平記』四十巻の中には、日本・中国・印度の故事がじつにおびただしく引用されており、その中でも中国の故事の引用が特に多い。増田欣氏によれば、その『太平記』に引用されている中国の故事のうち故事内容の列挙されているものは、六十二例ある。そのうち約半数にあたる三十話が『史記』の中に見いだせるとされている。¹⁾

さらに、『太平記』に叙述されている中国的要素には、説話

だけでなく、漢語章句や史伝的人物の名、故事題目においても『史記』関係のものが極めて多いとされている。そして『太平記』に与えた『史記』の影響がとても深いということは、量的な豊かさから十分に察知できると増田欣氏は研究されている。²⁾

そして、『太平記』に引用された故事の中でも、特に典拠との関係が明瞭であるものが、巻二十八「慧源禪菴南方合體事付漢楚合戦事」である。その主たる典拠は『史記』「項羽本紀」とされている。そしてその引用方法には特定の人物の批判など、『太平記』作者の主張と考えられる要素があり、単なる引用とはいえない部分もある。³⁾

邱嶺氏は、この「漢楚合戦事」は、『史記』「項羽本紀」を、享受者一般の関心に応えて、作り直されたのであろうと指摘されている。⁴⁾

●第一章 『太平記』における

虞美人の自殺場面の概要

まず、『太平記』巻九「主上・々皇御沈落事」、巻二十八「慧源禪巷南方合體事付漢楚合戦事」で描かれている虞美人の自殺場面を確認していききたい。しかし、なぜか『太平記』の巻九と巻二十八には、虞美人について同類の話が二カ所ある。その二つの部分について確認すると、巻九の漢楚説話は記述量が少なく、部分的なものである。しかし、巻二十八の漢楚説話は記述量が多く、巻九より内容が詳しい。ただ、虞美人についてはどちらの巻も同程度の記述量であった。その各々の場面の概要は次のようなものである。

巻九「主上・々皇御沈落事」は、後醍醐天皇の官軍と鎌倉幕府側の六波羅軍が、六波羅で戦い、時間の経過とともに官軍が次第に優勢になり始めた。そのため、幕府側の兵士は、逃げ落ちようとし始める。その際、六波羅探題北方の越後守北条仲時は、奥方に向かって、「何処までも貫女と一緒にいたいと考えていたが、鎌倉まで落ち延びることが出来るとも思えない。もし我がが討ち死にしたと聞いたなら、誰か良い人と再婚しなさい。」と伝えた。仲時の奥方は、「どうしてそんな薄情なことを言うのか。道中にもしものことがあったならば、共にそこで死にましよう。」と答えた。そこで漢楚の故事が出てくる。その内容は、項羽は高祖の軍勢に取り囲まれ、漢軍はその場所

で楚軍に向かい、楚の歌を歌った。項羽は陣幕の中に入ると、愛妾の虞美人に向かい、歌を作った。項羽が、悲しみ嘆き憤り、涙を流すと、虞氏も悲しみに耐え切れず、自分の身を剣で貫いて、項羽に先立って自害した。項羽は翌日の戦いに、二十八騎を従えて、漢の軍勢四十万騎を駆け破り、その後自害した。今の越後守仲時の心情も、同じであろうと思いい涙を流さない武士はいなかったというものである。

巻二十八「慧源禪巷南方合體事付漢楚合戦事」は、足利尊氏と高師直が足利直義の養子である足利直冬を討伐するために九州へ出発する。しかし、その前の夜に直義は京都から脱出をする。その後直義は南朝側に降伏し、その降伏を受け入れるかどうかという点について、南朝で審議が行われる。その際に北畠親房が、漢楚の故事を出す。その内容は、楚の項羽が漢の劉邦に攻められ、一度は固陵で漢軍に勝利するが、その後漢の韓信軍と戦い、四方を漢軍に囲まれてしまう。その際、項羽は今夜が最期だろうと思つたので、自分が伴っていた寵姫である虞氏という美人と酒宴をした。虞氏はその悲しみに堪えることができず自殺してしまふ。夜が明けた後、項羽はこの世に思い残すことはない喜んで漢軍に突撃していき、最終的に自害する。この漢楚の故事を話した後、直義の降伏についての審議が再開されるといふものである。

では、漢楚合戦譚に描かれているこの虞美人の自殺場面を『史記』との関連について確認していきながら、『太平記』作者が

どのように取り入れていったのか調べていく。

●第二章 「太平記」諸本における

虞美人の自殺場面の本文

それではまず、流布本『太平記』⁽⁵⁾巻九「主上・々皇御沈落事」にある項羽と虞美人の垓下の歌の場面について確認していく。それを見ると、

漢ノ兵四面ニシテ皆楚歌スルヲ聞テ、項羽則帳中ニ入り、其婦人虞氏ニ向テ、別ヲ慕ヒ悲ミヲ含シテ、自歌作テ云、

力拔^レ山兮氣蓋^レ世。時不^レ利兮難不^レ逝。々々々々可^レ奈何。

虞氏兮々々奈^レ若^レ何。

ト悲歌慷慨シテ、項羽泪ヲ流シ給シカバ、虞氏悲ミニ堪兼テ、則^レ自劔ノ上ニ伏シ、項羽ニ先立テ死ニケリ。

とある。また、巻二十八「慧源禪巷南方合體事付漢楚合戰事」では、

漢ノ兵是ヲ圍メル事數百重、四面皆楚歌スルヲ聞テ項羽今宵ヲ限ト思ハレケレバ、美人虞氏ニ向テ、泪ヲ流シ詩ヲ作テ悲歌慷慨シ給フ。虞氏悲ニ不堪、劔ヲ給テ自其刃ニ貫レテ臥ケレバ、項羽今ハ浮世ニ無思事ト悦テ、

とある。どちらの場面も、項羽が詩を作って、虞美人に向かつて歌い、虞美人は悲しみに耐えきれずに自殺してしまつたというものである。この巻九「主上・々皇御沈落事」と巻二十八「慧源禪巷南方合體事付漢楚合戰事」における虞美人の自殺場面に

ついて、巻九の場面では、劍の上に身を伏せる、つまり刃で身を貫くということが描かれている。そして、巻二十八の場面では、虞氏が劍を賜つて（おそらく項羽から）、その劍で自害するということが描かれている。これを見ると、虞美人が自殺する手順について若干の違いがあることが分かる。ただ、劍を用いて自殺したという部分については違いがない。

それでは、『太平記』諸本の巻九、巻二十八を見て、虞美人の自殺の場面について違いがあるかどうかということを確認していきたい。最初に、『太平記』神宮徴古館本、玄玖本、西源院本⁽⁶⁾、神田本⁽⁷⁾における巻九「主上・々皇御沈落事」の虞美人の自殺場面を見ていきたい。ちなみに、天正本『太平記』では、巻九、巻二十八の虞美人の場面は載っていない。

では、神宮徴古館本を中心に、波線部分について異同を記しておく。

まず、巻九の場面から始める。「神宮徴古館本」巻九では、

漢兵の四面におゐて皆楚歌をうたふを聞て、項羽即帳中に入り、其夫人虞氏にむかつて、別をしたひ悲をふくんていはく、(中略)と、項羽涙を流給しかば、虞氏悲に堪煩てみつから劔上にふし、項羽にさきたちて死にけり

とある。玄玖本では、「劔上」が「劔、上」、「さきたちて」が「先^テ」とある程度ではほぼ同文。

西源院本では、「堪煩て」が「堪カネテ」、「死にけり」が「死ニ給ケリ」とある程度ではほぼ同文。

神田本では、「堪煩て」が「たえかねて」、「劔上」が「劔ノ上」とある程度でほぼ同文。

次に、卷二十八「慧源禪巷南方合體事付漢楚合戰事」における虞美人の自殺場面を見ていきたい。神宮徴古館本卷二十八では、

四面みな楚歌するを聞て、項羽是を限と被思ければ、美人虞氏にむかつて、涙をなかし、詩をつくりて悲歌慷慨したまふ、虞氏悲にたえず、劔を給りて自其刃に被貫て伏ければ、項羽今は浮世に思置ことなしと悦て、

とある。玄玖本では、波線部全く同文。

西源院本では、「給りて」が「賜テ」、「伏ければ」が「臥ケレハ」とある程度でほぼ同文。

神田本では、「給りて」が「給ハつて」とあるのみでほぼ同文。

『太平記』諸本を確認すると、『太平記』卷九の場面では、美人が自分から劔の上に伏し死亡する。卷二十八の場面では、劔を誰かから（おそらく項羽）から賜つてから自刃し、死亡する。この二つの死亡の仕方はどの諸本でもおおむね同じであることが分かった。その他、「給はる」などの漢字の違いや「死にけり」を「死ニ給ケリ」と字を増補するなど違いは若干あるが、自ら劔で死ぬということとは『太平記』諸本の卷九、卷二十八でも同じであった。

では、この『太平記』卷九、卷二十八における虞美人の自殺の場面はどの書物を参考にして描いたのであろうか。

●第三章 『太平記』の典拠と『史記』

まず、『太平記』作者が漢楚合戰譚を書くにあたって依拠したと思われる『史記』^⑩「項羽本紀」の垓下の歌の場面を確認してみたい。

漢軍及諸侯兵圍之數重。夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。項王則夜起飲帳中。有美人、名虞、常幸從。駿馬、名騶、常騎之。於是、項王乃悲歌慨、自爲詩曰、

力拔山兮氣蓋世。時不利兮騶不逝。騶不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。

歌數闕。美人和之。項王泣數行下。左右皆泣、莫能仰視。これを見ると、虞美人が自殺したという記述は、『史記』には見られない。『太平記』の漢楚説話と『史記』の関係については、次のような研究がある。増田欣氏は、『太平記』の典拠については以下のように述べている。

これらの説話のなかには、『太平記』の直接の典拠を他（『史記』以外）に求めるべきものも混じっており、また他の文献に見える類話や伝承説話の要素と複合または習合したり、作者によつて意識のおよび、無意識的に変改された要素の加わっているものも多いので、『太平記』と『史記』との交渉関係の親密さを言うためには、個々の説話についてのより精細な分析が必要である。^⑪

邱嶺氏は、『太平記』と『史記』項羽本紀の関係について以下のように述べている。

『漢楚合戦事』は九千字にもほる、作品中でもっとも長く挿入された中国故事だが、その直接典拠も「項羽本紀」である。勿論、『史記』の「秦始皇本紀」からも、「高祖本紀」からも引用はしているが、部分的に過ぎず、主にやはり「項羽本紀」を源泉にしているのである（中略）。『漢楚合戦事』では、原典『史記・項羽本紀』に対する改作も顕著に行われている。¹²⁾

また、遠山美紀氏は、項羽と范増の関係性に注目して以下のように述べている。

〈漢楚合戦事〉は、先行研究でも指摘されているように部分的には「高祖本紀」に依拠しているが、それは「項羽本紀」の叙述を補うという程度のもので、やはり大部分は「項羽本紀」に基づいていると考えられる（中略）。〈漢楚合戦事〉を、その主たる根拠と考えられる『史記』「項羽本紀」と比較してみると、『太平記』には、項羽と范増の関係において、〈暗君〉と〈忠臣〉という役割を強調する改作の方向性が認められた。¹³⁾

そして山田尚子氏は、『太平記』巻二十八における漢楚合戦譚について、項羽の臣下である范増に注目して以下のように述べている。

『太平記』の漢楚合戦譚においては、親房が自らの主張を

なぞらえるべく名前を掲げたところの、陳平や張良といった劉邦側の臣下より、むしろ、敗北した項羽の臣下である范増の方が、より特徴的に描かれていることに気づく。¹⁴⁾

と述べている。また、山田尚子氏は項羽本紀と『太平記』とは、范増の死にまつわる記述が大きく異なると述べており、それは忠臣としての范増と無能な君主としての項羽のあり方を強調する傾向であると述べている。

このように、『太平記』の『史記』受容は必ずしも『史記』本文に忠実というわけではなく、『太平記』作者が改作を行った部分もある。だが、改作については、二つの可能性が考えられる。一つは作者が作ったという可能性、もう一つは『史記』以外の典拠から改作を行ったという可能性である。

もし、この虞美人の話が、『太平記』作者の意図で改作されたとすればどのような可能性があるだろうか。『太平記』作者が改作を行う場合について、遠山美紀氏は、『史記』「項羽本紀」と比較すると、『太平記』では、項羽の誤りを正そうとする（賢臣）范増の役割を改作によって強調する傾向がある。さらに、范増失脚によって項羽は天下を奪われたという漢楚合戦事の主題が、賢臣のいない南朝の政道を批判する構造になっていると考えられると述べている。¹⁵⁾

これをふまえると、『太平記』において、作者の意図で故事に改編を加える場合、本筋である『太平記』の対比上の都合という可能性が強いが、虞美人の自殺方法については、太平記の

内容と特に対応する点がなく、故事説話の範囲内で完結する問題なので、『太平記』との対比によって改作したわけではないと思われる。

やはり、この虞美人の場面を典拠も無しに改作したという考えは少し早計のように思われる。そのため、『史記』以外の典拠はあつたのかということについて考えていくことにする。

●第四章 『楚漢春秋』における虞美人

では、『太平記』に描かれている虞美人の自殺場面の参考になるような書物はあつたのかということについて調べていきたい。まず、『史記』の注釈部分にある虞美人の場面を確認する。

於是項王乃悲歌慨、自爲詩曰、

「力拔山兮氣蓋世、時不利兮難不逝。難不逝兮可奈何、

虞兮虞兮奈若何！」

歌數闋、美人和之。項王泣數行下、左右皆泣、莫能仰視。（正義）和音胡臥反。楚漢春秋云、「歌曰『漢兵已略地、四方楚歌聲。大王意氣盡、賤妾何聊生。』」

と、波線を引いた部分の注釈としてこのように説明している。（正義）とあるのは、唐の張守節による『史記』の注釈書『史記正義』⁽¹⁶⁾のことである。この『史記正義』によると、『楚漢春秋』には、虞美人が項羽の歌に対して、これに応じたとある。『楚漢春秋』⁽¹⁷⁾とは、漢の陸賈が書いたものであり、漢と楚の興亡のことを記している。では、その『楚漢春秋』の虞美人の場面を

確認してみると、

美人和項羽歌

歌曰漢兵已畧地四方楚歌聲太王意氣盡賤妾何聊生

史項羽本記正義

王應麟困學紀聞云太史公述楚漢春秋其不載

於書者正義云項羽歌美人和之楚漢春秋云漢

兵已畧地四面楚歌聲太王意氣

盡賤妾何聊生是時已爲五言矣

とある。この歌は、「漢兵すでに地を略し、四方に楚の歌声す。大王の意気尽きたれば、賤妾なんぞ生をやすんぜん」と読み、「漢の兵がすでにこの地を征服しました。四方から楚の歌声が聞こえます。大王の意気が尽きた今、賤しい妾である私はどうして生きていくことができるでしょう。」という意味ではないかと思われる。この部分を読んでみると、はっきり虞美人が自殺したとは記述していない。ただ、虞美人が自殺をしたと読めなくもないだろう。

それでは、『太平記』作者がこの『楚漢春秋』を読んだ可能性はあるだろうか。室町中期の禅僧万里集九の詩文集である『梅花無尽蔵』の注釈書を見ると、『楚漢春秋』の名前がある。その部分を見てみると、

前漢書高祖紀第二云。五年後九月。徙諸侯于關中。治長樂宮。同列傳第十三。叔孫通辭人。

晉灼曰。楚漢春秋名何。師古曰。薛

聖名編二卷。秦時以文學徵。

とある。この場面は、劉邦が楚を滅ぼした後の話で、劉邦は自

分の家臣が多く愚行を行つてたことを心配した。そこで家臣の叔孫通が「魯の学生を呼び、朝廷の儀礼を盛んにして家臣の態度を守るようにしましょう。」と伝えた。この劉邦に関する話の後、漢の武帝をたたえて山の神が万歳をとなえたという内容に変わる。しかし、この部分は、本文を見ても分かるように、『漢書』⁽²⁾から抜き出していると思われる。この場面が描かれている『漢書』卷四十三「酈陸朱叔孫通傳第十三」を確認すると、

叔孫通、薛人也。(一)

(二) 晋灼曰、「楚漢春秋名何。」師古曰、「薛、懸名、屬魯國。」

とある。『梅花無尽蔵』に『楚漢春秋』の名前はあったが、これは『漢書』からそのまま抜き出しているだけなので、伝来の証拠にはならない。

ただ、『楚漢春秋』にある虞美人の歌から、虞美人の自殺が想像された可能性は考えられよう。しかし、自ら剣で死ぬという部分は『楚漢春秋』にも描かれていない。

●第五章 「古文真宝」「虞美人草」における虞美人

では、虞美人が自ら剣を用いて死ぬという場面は、何に依つたのだろうか。宋の黄堅が編者で、元の林以正が校刷したといわれる、漢から宋までの著名な詩を集めたとされる『古文真宝』⁽²⁾前集に虞美人に関連する詩がある。

鴻門玉斗紛如雪
十萬降兵夜流血

咸陽宮殿三月紅

霸業已隨煙燼滅

剛強必死仁義王

陰陵失道非天亡

英雄本學萬人敵

何用屑屑悲紅粧

三軍散盡旌旗倒

玉帳佳人坐中老

香魂夜逐劍光飛

青血化為原上草

芳心寂寞寄寒枝

舊曲聞來似劍眉

哀怨徘徊愁不語

恰如初聽楚歌時

滔滔逝水流今古

漢楚興亡兩丘土

當年遺事久成空

慷慨樽前爲誰舞

これは、宋の曾鞏（子固）の作とされる「虞美人草」という七言古詩であり、漢楚合戦における虞美人のことを詠じている。この詩を訓読すれば、「鴻門の玉斗紛として雪の如し、十萬の

降兵夜血を流す。咸陽の宮殿三月紅なり、覇業はすでに煙燼に
随いて滅ぶ。剛強なるは必ず死し仁義なるは王たり。陰陵に道
を失うは天の亡ぼすに非ず。英雄本と學ぶ万人の敵を。何ぞ用
いん屑屑として紅粧を悲しむを。三軍散じ尽くして旌旗倒れ、
玉帳の佳人坐中に老ゆ。香魂夜劍光を遂うて飛び、青血化して
原上の草と為る。芳心寂寞として寒枝に寄せ、旧曲聞き来つて
眉を斂むるに以たり。哀怨徘徊して愁いて語らず、恰も初めて
楚歌を聴く時の如し。滔滔たる逝水今古に流れ、漢楚の興亡兩
つながら丘土。当年の遺事久しく空と成る、樽前に慷慨して誰
が為にか舞う。」となる。

波線を引いた部分が虞美人について表していると思われる。
この波線を引いた部分の解釈は「三軍の大兵はちりぢりになり、
味方の旗は倒れて戦は敗れ、閨の玉の飾りにある垂幕の中にい
た虞美人も、たちまち悲愁のために年老けて見えるようであつ
た。虞姫はその夜自分で首を刎ねて、劍の光と共に、その香ば
しい魂は飛び去り、その真赤な血は化して野原のほとりの草と
なつてしまった。」というものである。ここを見ると、虞美人
は劍で死んだと読むことができる。さらに、劍を使って自殺し
たと読んでいいのではないだろうか。ちなみに、「香魂」とい
う部分には注が付いており、「虞美人が劍で自分の首を切つて
死んだこと。この伝説がいつごろから存在するのかわからない
が、『史記』などの確かな史書に自刎の記載はない」と付いて
いる。『太平記』作者はこの詩によって、虞美人の刀劍自殺を

想像し、『史記』「項羽本紀」の虞美人の場面とは違う改作をし
たのではないだろうか。

『古文真宝』は、前集十卷・後集十卷の体裁を取っており、
中国よりもむしろ日本の方で多くの支持を得ていたとされる。
『古文真宝』の日本への伝来時期については諸説がある。太田
亨氏は以下のように述べている。

特に鎌倉時代末から隆盛に向かう禅林において愛玩された。
(中略)、五山版として『魁本大字諸儒箋解古文真宝』が刊
行されると、その受容にいつそう拍車がかかった。²³⁾

また、塚越義之氏は、以下のように述べている。

『古文真宝』は、元来私塾の教科書として編集されたもので、
中国ではあまり脚光を浴びることはなかった。しかし、室
町時代に伝来して以後、前述のごとく禅林の間で急速に流
行することになる。²⁴⁾

そして、堀川貴司氏は、以下のように述べている。

中世の禅林、特に南北朝・室町時代の京都五山は、漢詩文
を中心にさまざまなテキストが生成する場であったが、そ
の前提には、中国からの書物の輸入、その複製(書写・出
版)、それらへの情報付加(書き入れ)、逆にそれからの情
報抽出(抜き書き)、目的に応じた再編成(自家製の韻書、
類書)といった活動が存在する(中略)。具体的には、初
学書である『三体詩』『聯珠詩格』『古文真宝』(中略)な
どは質量ともに豊富である。²⁵⁾

これらの論をふまえると、『古文真宝』の伝来時期は定まってはいるが、おそらく南北朝時代または室町時代には日本に伝来していたとみて良いだろう。

日本に『古文真宝』が伝来していたということはわかった。ただ、『太平記』が成立していた時代には『古文真宝』は日本に伝来していたのであろうか。『太平記』の成立時期に関して、増田欣氏は、以下のように述べられている。

『太平記』が現在われわれの見るような四十巻本として成立したのは、応安三年（一三七〇）七月もしくは翌四年八月以後、南北朝期（下限は一三九二年）を下らない時期であるとされている。ただそれが、いかなる作者の手によって、いかなる過程をたどって四十巻本の成立に至ったか、またその成立の下限はいつかという点になると、いろいろな立場からさまざまの議論が提出されてはきたけれども、依然として多くの謎を残したままである。⁽²⁶⁾

ただ、この場合『古文真宝』が室町時代に伝来していると論じている方々との間に矛盾が生じる。もし、『太平記』が『古文真宝』前集の「虞美人草」を参考に巻九、巻二十八の虞美人の場面を描いたのであれば、『古文真宝』の伝来時期は南北朝時代もしくはそれ以前になるであろう。

では実際に『古文真宝』はいつ頃日本に伝来し、人々に読まれたのだろうか。五山禅僧が『古文真宝』を読んでいたということを堀川貴司氏が以下のように述べている。

禅僧の漢籍研究が、ある程度同時代の中国儒学の影響を受けながらも、漢籍の全体研究を目指すのではなく、漢詩文作成に必要な知識・語彙を知るといった目的が中心にあり、それに役立つテキストが選択されたためである（中略）。
具体的には、初学所である『三体詩』『聯珠詩格』『古文真宝』、規範とすべき作品である『東坡詩』（中略）などは質量ともに豊富である。

これを見ると、日本では『古文真宝』が伝来した後、禅僧などに読まれていたことが分かる。では、『太平記』の作者は『古文真宝』が日本に伝来してきたときに、それを受容していたのだろうか。柳瀬喜代志氏によると、

それは『三体詩』『聯珠詩格』『古文真寶』（前集）等の、詩法の書と見、作詞上の規模とした初学必修の詩文集と、詩論の教本であった詩話の書からの引用に傾いているから、作者はこれらの書を既習して詩句を誦んじていたと見てまちがひなかろう。詩話の書に載る評判が作者に詩句を採用させ、或いは唐宋詩偏重の引用を促したのでろう（中略）。
中世の国文学は、平安朝の文学が取り込んでいた漢籍と新米の文学的世界とを重層的に、或いは輻輳的に摂取し、且つ新旧の漢文学を融合調和して糧とするという様相を現している。『太平記』は旧新の漢籍を輻輳して摂取し、やや新風に傾いていたあとを顕著にする。⁽²⁷⁾

と述べられており、『太平記』作者が詩句を引用する際の出典

の一つとして『古文真宝』の前集が挙げられている。柳瀬氏の指摘は主に、『太平記』の引く詩句についてのものだが、詩句ではない虞美人の自殺場面についても典拠になったのではないだろうか。さらに、「虞美人草」の詩の内容を『太平記』に盛り込んでいる可能性も考えられないだろうか。「刀剣」を用いるという点は、『古文真宝』に依っているとすれば理解することが出来る。『太平記』作者は、『古文真宝』の「虞美人草」を何らかの形で読んだ、もしくは伝え聞いたことがあったのかもしれない。そしてそれをふまえて、『史記』「項羽本紀」に描かれていない虞美人の自殺場面を想像し、『太平記』で虞美人の死に方について改作を行ったのではないだろうか。

●終章 結論

『太平記』の虞美人の自殺場面は、『太平記』作者が依拠したと思われる『史記』「項羽本紀」には描かれていなかった。『太平記』作者は『史記』とは違う別の書物から虞美人の自殺場面を読み取り、それを参考にして『太平記』の項羽と虞美人の場面を描いたのである。その場面を描く際、中国から伝わってきた『古文真宝』が『太平記』作者の元に届く、もしくは話が伝わるという形で、『太平記』作者が虞美人の自殺方法を創作したということも考えられる。

ただ、他に虞美人について描かれている資料があった可能性ももちろんある。なぜなら、『楚漢春秋』や『史記』はかなり

早い段階で成立していたので、それらの書物と『古文真宝』の間に虞美人の伝説が出来ていた可能性もあるためである。中国では『楚漢春秋』の詩文や『史記』から虞美人についての構想を膨らませた、もしくは虞美人についての異伝が中国でできあがっていた可能性も考えられる。

『古文真宝』以外に「虞美人草」について述べているものとして、宋の沈括が書いた『夢溪筆談』⁽²⁾というものがある。それによれば、「虞美人草は人が虞美人草の曲を演奏すると、枝葉をみな動かせるが、他の曲ではそんなことはない」という伝説が載っている。また、宋の王灼が書いた『碧鷄漫志』⁽³⁾には、先ほどの虞美人草のこと、曾鞏の「虞美人草」の詩（『碧鷄漫志』だと曾子宣夫人魏氏が作ったと書かれている）が書かれている。

しかし、虞美人の刀剣自殺に関する記述は、今のところ、『古文真宝』以外見つからない。今後、他に有力な典拠が見つかる可能性もあるだろう。また、典拠の問題以外に、作者の意図による創作という可能性も皆無とは言いつれない。しかし、この時代の日本文学作品で女性の刀剣自殺を描く例は見当たらないように思う。したがって、『太平記』作者の創作の可能性は低いのではないだろうか。やはり、現時点では、『太平記』作者が漢楚合戦譚を描くときに参考とした書物としてもう少し『古文真宝』を有力視して良いと思われる。したがって、『太平記』作者は、巻九、巻二十八における虞美人の自殺場面について、『古文真宝』「虞美人草」の影響を少なからず受けて改作し

たと考えてもよいのではないだろうか。

原稿提出後、中国・北京日本学研究中心・博士後期課程の張静宇氏から、佐伯真一先生を通じて、「『太平記』作者が、虞美人の自殺場面について、『古文真宝』の影響を受けている可能性は高いが、『詩人玉屑』巻二十に収められた『虞美人草』の詩に影響を受けた可能性の方が、より高いのではないか」という趣旨のご指摘をいただいた。今後検討したい。

注

- (1) 増田欣 『『太平記』の比較文学的研究』(角川書店 一九七六年)
- (2) (1)に同じ。
- (3) 遠山美紀「〔賢臣〕像の虚と実―『太平記』巻二八「漢楚合戦事」を中心に―」(『新潟大学国語国文学会誌』五一号、二〇〇九年・九月)
- (4) 邱嶺「『太平記』における『史記・項羽本紀』の受容」長谷川端編『軍記文学研究叢書(八) 太平記の成立』(汲古書院 一九九八年)
- (5) 後藤丹治・岡見正雄校注『『太平記』 日本古典文学大系(岩波書店 一九六二年)
- (6) 長谷川端・加美宏・大森北義・長坂成行編『神宮徴古館本太平記』(和泉書院 一九九四年)
- (7) 前田育徳会尊経文庫編『玄玖本太平記』(勉誠社 一九七三年)
- (8) 鷲尾順敬『西源院本太平記』(刀江書院 一九三六年)
- (9) 市島謙吉編『神田本太平記』(国書刊行会 一九〇七年)
- (10) 吉田賢抗『史記』新釈漢文大系(明治書院 一九七三年)
- (11) (1)に同じ。
- (12) (4)に同じ。
- (13) (3)に同じ。
- (14) 山田尚子「伍子胥と范增―『太平記』巻二十八所引漢楚合戦譚をめぐって―」『中国故事受容論考―古代中世日本における継承と展開―』(勉誠社 二〇〇九年)
- (15) (3)に同じ。
- (16) (漢)司馬遷撰(宋)裴駰集解(唐)司馬貞索隱(唐)張守節正義『史記』(中華書局 一九五九年)
- (17) 『百部叢刊集成』(藝文印書館印行 一九六七年)
- (18) 近藤春雄『中国学芸大辞典』(大修館書店 一九七八年)
- (19) 市木武雄『梅花無尺藏注釋』(八木書店 一九九三年)
- (20) (漢)班固撰(唐)顔師古注『漢書』(中華書局 一九六二年)
- (21) 星川清孝『古文真宝(前集)』新釈漢文大系(明治書院 一九六七年)
- (22) 佐藤保・和泉新訳『中国の古典二六 『古文真宝』』(学習研究社 一九八四年)
- (23) 太田亨「日本中世禅林における『古文真宝』受容の様相―「秋風辞」注の「三韻一叶」「六韻一叶」をめぐって―」(二〇一四年)
- (24) 塚越義之『俳諧類船集』と中国古典―『古文真宝』を中心に―

(國學院雜誌 二〇〇五年)

(25) 堀川貴司 『続 五山文学研究 資料と論考』 (笠間書院 二〇一五年)

(26) (1) に同じ。

(27) (24) に同じ。

(28) 柳瀬喜代志 「中世新流行の詩集・詩話を典拠とする『太平記』の表現―『太平記』作者の囊中の漢籍考―」 和漢比較文学会編 『和漢比較文学叢書 (一五) 軍記と漢文学』 (汲古書院 一九九三年)

(29) (宋) 沈括 梅原郁訳注 『夢溪筆談』 (平凡社 一九七八年)

(30) (宋) 王灼撰 『碧雞漫志』 (藝文印書館印行 一九六六年)

(やまぐち・しょうた / 平成二十七年卒)